

【報告】

国立大学における国際共修授業の実施状況と先行研究の動向

－東北大学の取り組み－

高松 美能^{1)*}

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構

留学生と国内学生が共に学ぶ国際共修授業は、大学における「内なる国際化」につながる効果をもたらすものである。本稿は、日本の国立大学で提供される国際共修授業数と、国際共修授業の先行研究の動向について調査した結果を紹介する。同様の視点で調査を行った、高橋（2019）と末松（2019）の先行研究を参考に、2019年から2023年の間、新型コロナウイルスの影響を受けて、国際共修授業がどのように変化したのかを確認する。大きくは、新型コロナウイルスの影響で留学生の移動が制限され、授業はオンライン化された。本来、学生同士が交流することを目的の1つとする国際共修授業は、授業の進め方などの面でさまざまな課題に直面した。一方で、全国の国際共修授業の提供数、および先行研究の動向といった点で、大きな変化が見られなかったことも確認された。本稿では調査結果を報告するとともに、今後の国際共修授業の可能性と課題をまとめる。

1. はじめに

大学の国際化を進めるうえで、学内の留学生の数が増加する中、学内に留学生と国内学生が一緒にいるからといって自然発生的に交流するとは限らない。そこでは、大学による働きかけが必要であり、その1つとして、留学生と国内学生が共に学ぶ授業の提供が挙げられる。留学生と国内学生が1つの教室で共に英語や日本語、またはその他の言語で学ぶことで、留学生にとっては日本人学生と知り合う機会となり、日本での生活に適応するうえでの手助けとなりうる。また、国内学生にとっては留学の準備となり、異文化理解の場ともなりうる。さらに、英語での国際共修授業では語学力の向上も期待できる。

東北大学では留学生と国内学生が共に学ぶ授業を「国際共修授業」と呼んでいる。東北大学ホームページで国際共修とは、「文化や言語の異なる学生同士が、グループワークやプロジェクトなどでの協働学習体験を通して、意味ある交流（Meaningful Interaction）により相互理解を深めながら、他者を理解し、己を見つめなおし、新しい価値観を創造する一連のプロセスを指します」と定義している（国際共修 | 東北大学 (tohoku.ac.jp)）。東北大学では、学生が「国際共修」という環境で学ぶとき、文化や言語の異なる学生が交

流し、学ぶ合うことを通じて相互理解を深めるだけでなく、他者理解、自己理解、さらには新たな価値観を創造することができると考え、このような学びを最大化することを目標に授業開発・設計に取り組んでいる。

留学生と国内学生が共に学ぶ授業は、世界の国々でも実践されている。一方で、国によって国際共修授業を提供する目的に違いがあり、世界と比較して調査することが難しい事情もある。例を挙げれば、英語圏では国際共修という環境を作り出さなくとも、クラスの中に留学生がいて国内学生と共に学ぶことは、ある意味当然である。その中では、国内学生は母語である英語での授業に自身の興味関心で参加しており、必ずしも非英語圏の学生と交流したり、議論したりすることに興味があって授業に参加しているわけではない。日本の大学では、交換留学等を通じて留学生を受け入れ、留学生が英語で授業を受けることができる環境を整えている大学が多数ある。このような大学では、国内学生は留学生と交流する目的で、国際共修授業を自ら履修しており、留学生と共に学ぶことに興味を持っている。このように、国により国際共修という言葉の意味、その環境に集まる学生の意識に違いがある。そうは言っても、多様なバックグラウンドの学生と共に学ぶ授業という意味では、大学があ

*）連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 mino.takamatsu.c3@tohoku.ac.jp
投稿資格：1

えて国際共修の環境を作り出すか否かは別として、世界の大学でも実践されていることは事実であろう。

1.1 本稿の目的

本稿では、新型コロナウイルス流行の影響を受けて、日本の国際共修授業、および国際共修の研究に変化が見られたのかを確認するとともに、東北大学の取り組みを紹介することを目的としている。

高橋（2019）は全国の国立大学で提供される国際共修授業数を調査し、東北大学が国立大学の中で最も多いことを確認している（高橋 2019:7）。高橋（2019）の調査は、新型コロナウイルス流行以前のものであり、その後新型コロナウイルスの影響で授業の実施形態や留学生数が大きく変化した。コロナ禍では、多くの大学でオンラインによる国際共修授業が検討・実践された。また、それまで協定校等の学生交流のネットワークは国外が中心であったが、コロナを契機として、国内の大学ともネットワークが広がり、コロナ前に比べ、オンラインを活用してより多様なバックグラウンドの学生が1つのクラスに集うことが実現した。本稿では、高橋（2019）の調査から新型コロナウイルスの影響を受けた数年後の2023年度に国際共修授業の授業提供数の調査を行った結果を紹介する。

加えて、本稿では新型コロナウイルスの影響を受けて、国際共修授業の研究動向の変化についても確認する。末松（2019）はコロナ前に国際共修授業に関する先行研究の調査を行っている。本稿では、末松（2019）の調査以降（2018年以降）の国際共修授業の研究の変化を把握する目的で、追加調査を行った結果も紹介する。末松（2019）の調査では、日本の国際共修授業に関する先行研究が、授業実践者の実践報告にとどまっていることを指摘している。本稿では、コロナの影響を受けて、研究面での変化も確認する。

2. 全国の国際共修授業の実施状況と東北大学の国際共修授業の特徴

2.1 国際共修授業の実施状況

筆者は、研究協力者（東北大学文学研究科博士課程の学生1名と文学部4年の学生1名の合計2名）の協力を得て、2023年度4月～7月にかけて全国の国立大学の国際共修授業の提供数を確認した。

2.1.1 調査概要

各大学のホームページから、授業検索ページの中で国際共修授業に該当する授業を検索し、授業数をカウントしていった。国立大学84のうち、1つの大学（政策研究大学院大学）はシラバス情報が公開されていなかったため、残り83を対象にシラバス検索の中で「国際共修、多文化、異文化、共修」をキーワードに、シラバスの内容を読み、共修と判断できるものをカウントしていった。対象となった授業は、2023年度前期と後期の授業である。主に一般教養の学部生を対象とするものであったが、中には専門科目、大学院生を対象とするものもあった。

2.1.2 結果

まず、国立大学で提供される国際共修授業数に関する調査結果を図1にまとめる。

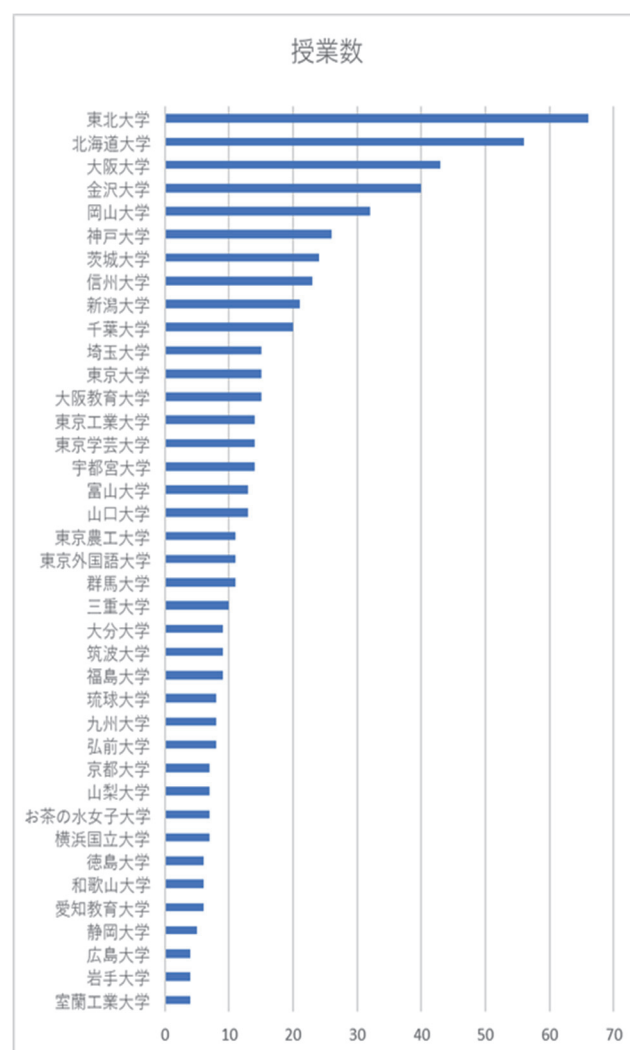


図1 国立大学で提供される国際共修授業数

図1を見ると、東北大学が最も多くの授業を提供していることが分かる。高橋（2019）調査でも東北大学が最多の授業提供数であることが確認されている。2番目に横浜国立大学が挙げられていたが、今回の調査では、北海道大学の授業数が多いことも確認された。

今回のキーワード検索で国際共修授業に該当する授業が確認できなかった大学は18大学あった。この結果は、高橋（2019）の調査で28大学としている数から減っており、このことは新たに10大学で国際共修を取り入れた授業をシラバスの中で明記していることが確認された。

その他、検索を行う中で、シラバスや科目名の中で、「国際共修」という言葉を使っている授業が確認されたのは、神戸大学と新潟大学で、その他の大学では、「多文化クラスや国際教育科目」といった、他の言葉で表現していたことも分かった。

次に、国際共修授業の中で指導上使用している言語についてまとめると、図2のようになった。

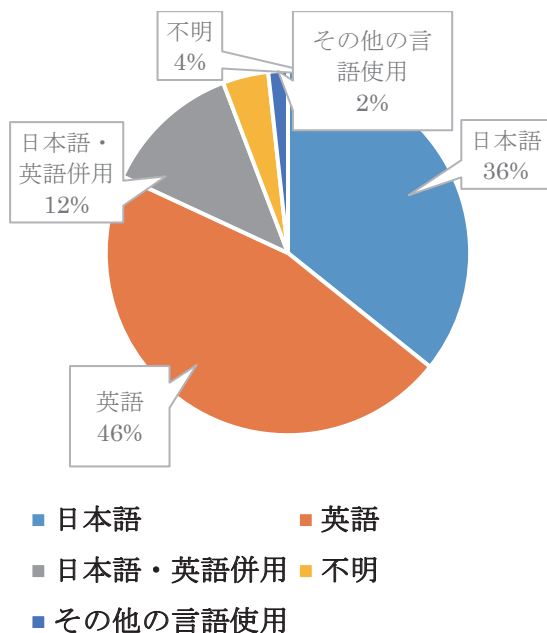


図2 授業での教授言語

高橋（2019）の調査では、日本語での国際共修授業が最多であったが、今回の調査では英語での開講科目の方が多くなっている。その他の言語としては、韓国語や中国語、フランス語、ドイツ語など、さまざまな

言語が見られた。英語での開講科目が増えていることは、冒頭で述べた英語圏の大学で実践される国際共修授業との目的の違いとも関係があると考えられる。日本の大学では留学生を受け入れ、留学生が履修可能な授業を提供するといった意味で、英語で授業が受けられる環境を整備する傾向が高まっていることだ。その中で、国内学生は留学生との交流や、自身の語学力の向上といった目的で、国際共修授業を履修している。留学生と国内学生には履修に際し異なる目的があるものの、各自目的を持って参加し、国際共修の環境を活かして、自身の学びにつなげている。

次に、国際共修授業で取り上げるテーマについて、シラバスの中でキーワードとなっている授業内容を、複数集計で行ったところ、図3のような結果になった。

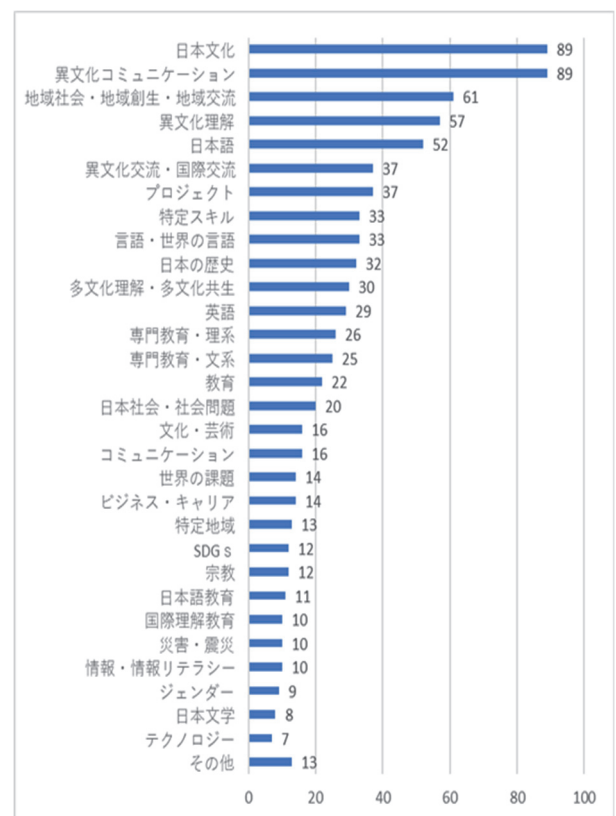


図3 国際共修授業で取り上げるテーマ

国際共修授業を実施している大学のシラバスの中で、授業で取り上げるテーマとして多くみられた言葉は、「日本文化、異文化コミュニケーション」であった。その他、「地域社会・地域創生・地域交流、異文化理解、日本語」などを取り入れた授業も多くみられた。「地

域との連携」を取り入れた授業については、地方の大学で提供される傾向が見られた。この点に関して具体例を挙げると、大分大学では留学生と国内学生が授業の中で街づくりを提案するといった内容の授業があり、また、岡山大学や東北大学では「地域の祭り」をテーマに留学生と国内学生が共にプロジェクトとして祭りに一緒に取り組むといった授業が提供されていた。

2.2 コロナ禍での東北大学の取り組み・特徴

東北大学では、2022年度に4半期に1回の全学教育科目の改革を行い、国際共修授業については、部局で提供する一部の国際共修授業を除き、その他すべての国際共修授業が国際教育科目群というカテゴリーの中に位置づけられた。このことで、学生にとって国際共修授業がどの科目群で提供されているのかが分かりやすく示されることとなった。また、学部によっては国際教育科目を選択必修と位置付けた。その結果、2022年度から履修希望者が2倍以上に増えた。2023年度は前期・後期合わせて65コマの国際共修授業を提供している。前期は31コマ、後期は34コマで、日本語開講科目は16コマ、二か国語での開講科目は1コマ、英語での開講科目は13コマとなっている。後期は日本語開講科目16コマ、二か国語での開講科目3コマ、英語開講科目は15コマとなっている。図2では、英語での開講科目が最多となっているが、東北大学では英語と日本語ではほぼ同数の開講科目数となっている。国際共修授業の主な対象は学部生であり、全学教育科目、いわゆる一般教養科目の位置づけで開講している。2023年度から一部の国際共修授業の対象を、大学院生にも拡大し、大学院共通科目開講科目として開講した。これまでの学部生向け国際共修授業に、大学院生が異なる役割で参加することで、留学生と国内学生のこれまでの学びに変化が得られることを期待している。ここでは、学部生と大学院生が同じ立場で参加するのではなく、大学院生はリーダー的な役割を担うことが期待されており、課題や評価といった点で、学部生と異なる設定がなされている点に特徴がある。

また、東北大学ではコロナ禍において、海外の協定校の学生がオンラインで東北大学の授業に参加できるシステムを構築した。加えて、全国の日本の大学で実

践される国際共修授業との単位互換制度(ICL-Channels)を導入した。ICLとは“Intercultural Collaborative Learning”(国際共修)の頭文字をとったことばで、複数の学習者が言語や文化的背景の違いを認め合い、それらの違いを取り入れて学び合う学習活動を指している。ICLを取り入れている国内の大学が参加し、オンラインを活用してICLを展開するプロジェクトが“ICL-Channels”である。ICL-Channelsは「国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の加速と世界展開」として、2021年度「大学の国際化促進フォーラム」に採択された。ICL-Channelsプロジェクトは、東北大学が幹事校となり、参加大学間での国際共修(ICL)教育活動の連携を通じてICLモデルを構築している。2023年度6月時点での参加大学は、東北大学、福島大学、東京外国語大学、信州大学、大阪大学、神戸大学、である(国際共修 | 東北大学 (tohoku.ac.jp))。

さらに、東北大学ではオンラインであっても国際共修授業を通じて学生の交流を促進するために、国際共修サポーター制度を開始した。これは、全学教育科目で開講される、国際共修を取り入れた授業科目に対して、担当教員と履修学生の間に立ち、サポートする学生のことである。国際共修サポーターは、グループディスカッションのファシリテーションや課題進捗状況のモニタリングなど、より円滑な授業を目指して担当教員を補助する役目を担っている。毎年募集をかけて事前に研修を行い、国際共修授業の担当教員がサポートを希望する授業にサポーターが入って、学生交流の促進を手助けしている(国際共修 | 東北大学 (tohoku.ac.jp))。

以上のように、東北大学ではコロナ禍においてもオンラインを活用して国際共修授業の提供を継続し、これまで以上に参加学生の枠を国内外に広げた。また、参加学生の対象を学内の大学院生にまで広げ、参加する1人ひとりに異なる役割を担わせ、学習活動を円滑化してきた。さらに、学生サポーターを活用して、学生主体で学生間の交流を促進する働きかけをおこなっている。

3. 国際共修授業の先行研究

末松（2019）は国際共修授業に関する先行研究の調査・分析結果をまとめている。そこでは、1994年～2018年の論文について「国際共修」、「多文化共修」、「多文化クラス」等のキーワードを用いて、CiNii Articles 検索、インターネット論文等の引用のトレーキングを行い、127件を調査対象として、国際共修授業における先行研究の傾向をとらえ、課題を指摘している。特に課題として挙げられたのは、「今回の調査対象論文は、実践報告が多数を占め、そのほぼ全てにおいて研究対象が執筆者自身の教育実践であった。また、調査に用いられるアンケート等は独自に開発されたものが多かった（10頁）」という点である。

筆者は、末松（2019）の調査以降、新型コロナウイルスの影響を受けて、国際共修授業の研究に変化があったのかを確認するため、研究協力者（東北大学文学研究科博士課程の学生1名）の協力を得て、2023年度1月～3月にかけて、2018年～2022年12月までの国際共修授業に関わる論文を対象に、検索エンジンCiNiiとGoogle Scholarを使って、「国際共修」、「多文化共修」、「多文化クラス」をキーワードに検索した。

その結果、95件の論文がヒットした。実際の論文のタイトル等を表1にまとめる。検索結果の内訳は、CiNiiとGoogle Scholarの検索で、「国際共修：104件」「多文化クラス：6件」「多文化共修：5件」がヒットした。そこから、以下のような観点で内容を確認し、表1に示す95件が国際共修授業に関する先行論文としてまとめられた。

- 1：3つのキーワードでの検索結果でヒットした文献の重複は1つにまとめる
- 2：1つのキーワードでの検索結果でヒットしたものの中にも同じタイトルの文献がみられたため、まとめる
- 3：雑誌の表紙などが検索結果にあったため、論文としては削除
- 4：先行研究、末松（2019）で取り上げられたものがみられた（2018年の文献に関して）ため、削除
- 5：本文が英語の文献は対象に含めなかった

全95件の論文の中で、実践報告が主な内容となっている論文が多く、研究対象が執筆者自身の教育実践であった。つまり、この点において2018年以降も変化がなかったことが確認された。実践例の中では、コロナ

表1 国際共修授業に関する先行研究

	論文タイトル	テーマ	著者名	掲載誌	発行年
1	多文化間アドバイジング・カウンセリングと連携～多様な学生たちの共修を通して～	2017年度の教育実践報告	田中京子・高木ひとみ・酒井崇・和田尚子・川平英里	名古屋大学国際教育交流センター紀要	2018
2	「内なる国際化」によるグローバル市民育成に関する事例研究	授業内容の紹介とアンケート・振り返りシートの質的・量的分析	水松巳奈	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	2018
3	留学生と日本人学生の共修による地域文化理解・地域交流を柱とした体験学習型授業の構築	高知大学の授業内容の紹介とアンケートと振り返りシートの分析	林 翠芳、大塚 薫、ガルシア デル サス エバ	高知大学留学生教育	2018
4	カリキュラム国際化と国際共修：留学生と国内学生の学びあいをデザインする	カリキュラム国際化・内なる国際化・国際共修の方法論と実践について	末松和子	異文化間教育	2018
5	多文化交流科目「文化としての日本マンガ」で留学生は何を学ぶのか	日本マンガを授業に取り入れることによる日本語学習への効果	小林 由子	日本語教育方法研究会誌	2018
6	異文化間能力の変容から見る異文化間協働学習の教育的効果—接触仮説とその発展理論の可能性—	国際共修科目を対象に、集団間接触の理論に基づき異文化間協働学習を実施し、異文化間能力の観点からどのような教育的効果があるかを検討	西岡麻衣子・八島智子	異文化間教育	2018
7	観光接触場面における「やさしい日本語」の可能性と課題：柳川市やさしい日本語ツーリズム事業の実例からの考察	観光の現状とやさしい日本語の説明、やさしい日本語の会話例	加藤好崇	東海大学大学院日本語教育学論集	2018
8	協働学習における授業改善の経緯と教師の役割：共修授業「グローバルコミュニケーション」「日本事情グローバル」の授業実践報告から	教員2名が2002年から長期にわたって実施している共修授業について考察。まず、その授業の開講形態と活動内容の推移を説明し、どのような試行錯誤や話し合いをもって授業改善を続けてきたかについて、1. 互恵的な相互依存関係、2. 対面での促進的相互交流、3. 課題達成における個人の責任の自覚、4. 社会的技能の意識化、5. 将来の実行性向上のための協働的活動評価、という観点から分析。最後に今後積極的に取り組まなければならない課題について言及	足立、祐子、池田、英喜	新潟大学高等教育研究	2018

9	日英バイリンガルクラスでの学生の学び～比較日本文化論の授業アンケート調査から～	授業の紹介とアンケート調査の分析	山田智久	言語センター広報	2019
10	国際共修の検証—文献リサーチを通して見えてくるもの—	国際経授業に関する先行研究の分析・考察	末松和子	留学交流	2019
11	多文化クラスにおける日本の学生の言語行動：使用言語の異なるクラスの比較から	英語と日本語による多文化クラスにおける日本の学生の言語行動に焦点を当てて、言語運用力ではなく言語行動に特化した比較実証研究を実施し、言語運用力以外の認知面での要因を調べた	山田悦子	高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習	2019
12	ブレ国際共修授業における国内学生の意識変容と学び—基礎ゼミでの試み—	授業内容の紹介と学習到達目標・最終レポートの質的・量的分析	渡部留美・島崎薫	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	2019
13	道内理工系三機関合同による異文化交流を通じた国際共修授業の実践	室蘭工業大学・苫小牧工業高等専門学校・函館工業高等専門学校の3校合同での異文化交流実践の紹介と学生意見の紹介	ディヴィッド タケ、昌樹 栗山、マルギット クラウゼ小野、真嗣 小	室蘭工業大学紀要	2019
14	国際共修授業の普及と多様なバックグラウンドの学生同士の多文化共生	国際共修授業における学生間の関係性づくりと多文化共生の実現	高橋美能	留学交流	2019
15	多文化共修科目4年目の振り返り：文化理解の変容に着目して	授業の詳細と課外学習・ゲストスピーカー講演などを詳細に紹介	岡智之	東京学芸大学紀要・総合教育科学系	2019
16	「多文化間共修」と「地域学習」の統合型プロジェクト学習の試み	授業紹介	藤美帆	留学交流	2019
17	インタビュー活動による地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築—国際共修による双方向往來の学びを通して—	高知県内の留学生へのアンケート調査と15の内容と同様の授業実践の紹介	大塚薫・林翠芳	留学交流	2019
18	国際共修クラスにおけるムスリム留学生のゲストスピーチが日本人大学生に与える影響について：質問紙調査及び個別レポートによる調査からの示唆	大学の異文化理解に関する講義において、ムスリム留学生による宗教に関するゲストスピーチが、日本人大学生にどのような影響を与えたか、質問紙および個別のレポートを用いて調査。その結果、イスラムに関するイメージはスピーチ後に有意に向上し、交流意識が高まったことを確認	園田智子	異文化コミュニケーション / 異文化コミュニケーション学会（紀要委員会）編	2019
19	海外研修の知見を生かした国内での国際共修の可能性—三重大学ベトナムフィールドスタディを事例に—	三重大学の短期海外研修のベトナムフィールドスタディの紹介と学生の感想の紹介	奥田久春・松岡知津子	三重大学高等教育研究	2020
20	大学教養課程における国際共修の試みと国内学生に対する効果：多文化間コンピテンス尺度に基づく検証	授業紹介と授業前後での意識変容を質問紙で調査	渡邊知釈・大和啓子	群馬大学国際センター論集	2020
21	留学生を対象とする国際ゼミにおける異文化理解教育と共修の展開	異文化理解教育の概要と東北福祉大学における授業の紹介	高 橋 加 寿 子	教職研究	2020
22	体験学習を通じた留学生と日本人学生の国際共修授業：地域との互恵関係の構築を目指した主体的な学びの場の形成	高知大学の授業内容の紹介とアンケートと振り返りシートの分析	林 翠 芳、大塚 薫、ガルシア デル サス エバ	高知大学留学生教育	2020
23	UNESCOユースセミナーにおける多文化共修型「地球市民教育」：文化、言語、民族を超えて共に学びあう	宿泊セミナーの紹介	小貫大輔・星久美子	東海大学紀要	2020
24	大学の教養科目として日本語教育を学ぶ「共修日本語」の授業デザイン	共修授業の定義と授業内容の紹介	久川伸子	東京経済大学人文自然科学論集	2020
25	多文化間共修プログラム開発に向けた課題—実践の考察から—	多文化共修プログラム内容の紹介と実践後の考察	恩村由香子・森美紀・山岸愛美	外国語教育論集	2020
26	多文化共生時代における学生主体国際交流プログラムの考察	多文化共修の概要と先行研究の紹介、そして国際学生交流プログラムの詳細の紹介と学生のコメントの紹介	関昭典・大瀬朝楓	東京経済大学人文自然科学論集	2020
27	正課外における国際教育交流の現状と課題に関する調査：大学教職員の視点に着目して	教員から見た国際教育交流について	川平英里	名古屋大学国際教育交流センター紀要	2020
28	（実践報告）多文化キャンパス環境を活用した包括的グローバルリーダー育成スキーム	立命館アジア太平洋大学の取り組みの紹介	五十峰聖・平井達也・秦喜美恵・カッティング美紀	グローバル人材育成教育研究	2020
29	民主的シティズンシップ教育の観点から見た日本語授業クラスゲストの学び	第二言語としての日本語学習を目的とした授業に、「日本人学生と留学生」という異なる言語・文化背景の学生がいる学習環境は、民主的シティズンシップを育くむ場となりうるのかについて考察	古内綾子・池田智子・齋藤伸子	人文学研究	2020
30	名古屋大学部活・サークルの国際化に向けて	名古屋大学における部活・サークルの活動状況、留学生の受入れ状況、留学生受入れに関して学生が期待する大学からの支援の調査	安部伸子・柴垣史・坂田亜紀	名古屋大学国際教育交流センター紀要	2020
31	個人の社会化が異文化理解を学ぶ学生に与える影響—日米の大学の授業におけるケーススタディ—	異文化理解や多様性に関して異なる歴史と経緯をもつ日本と米国の大学において実施される授業に着目し、学生個人の社会化プロセスが、授業での学びにどのような影響を与えているのかについて検討	水松巳奈・山中葵	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	2020
32	留学生との接触による日本人学生の「多文化」に対する意識変化—国際福祉開発学部の取り組みからの一考察—	キャンパスのグローバル化へ向けての課題と日本福祉大学の取り組みの紹介	祖父江カースティ	日本福祉大学研究紀要	2020

33	日本人学生と留学生の交流における認知のずれに関する研究	日本人学生と留学生の交流における認知のずれの検討	山口雄介・小林里華	日本経大論集	2020
34	接触場面における日本語母語話者の言語行動の特徴と意識-国際共修カリキュラムへの示唆-	PBL 型国際共修授業における言語使用に近い疑似的場面(課題解決型三人会話)を設定して収集した録音・録画データから、母語場面との比較により接触場面の特徴の抽出と整理	竹井光子・藤原美保	広島修大論集	2020
35	ICT を活用し海外の学生と行う国際連携型の協働学習『COIL』の教育効果と課題	COILの実践例の解説	池田佳子	大学教育と情報	2020
36	国際教育実践の学習効果測定の手法の一考察 : COIL Plus プログラムにおける BEVI の活用	COILPlusプログラムの紹介	バイサウスドン・池田佳子	関西大学高等教育研究	2020
37	留学生に対する教育支援活動を通じたTA・TFの成長—大学院生の役割意識と学びの観点から—	留学生をサポートするTA・TFの成長についての調査	小森 万里・岩井 茂樹・高井 美穂・岩井 康雄・五之治 昌比呂・立川 真紀絵・藤平 愛美・松岡里奈・水野 亜紀子	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究	2020
38	留学生と国内学生がともに学び合う国際共修: 信州の地域資源を活かしたプログラムを中心に	信州大学における共修授業の内容紹介と簡単なアンケートによる成果分析	仙石, 祐 永田, 浩一	信州大学総合人間科学研究 14 : 33-45 (2020)	2020
39	学生の国際共修のための理論セミナーと実践プログラムの展開 : 国際学生寮におけるアクティブラーニングプログラムの開発と実践	プログラムの開発経緯・紹介	川平英里・田中京子	名古屋大学国際教育交流センター紀要	2020
40	国際共修の効能と課題-コミュニケーション能力の向上を図る3大学実践事例-	特色、規模、立地の異なる国立 3 大学を対象とし、国際共修の根幹となる、学習者間、学習者・教員 間のコミュニケーションに着目し、効果的な教育介入、学習効果、教育実践における課題等につきそれぞれの実践事例を紹介	尾中夏美・高橋美能・黒田千晴	留学交流	2020
41	オンライン国際共修の取り組み	COIL (CollaborativeOnlineInternationalLearning) 型の授業設計と実践、COIL型国際協働演習の学習成果、今後の課題と展望について報告	加藤鈴子・大山貴穂・水谷彰伸・高丘理子	教育ブレティン	2020
42	正課外国際交流活動における国際共修 : 正課に比した活動の特徴と学生の学びに着目して	課外活動での国際共修について、留学生支援や国際交流を目的とするサークルに所属する学生へのweb調査とインタビューを行い、その実態や有益性を検証	末松 和子	留学生教育	2020
43	国際共修教育における異文化間コミュニケーション能力の育成	(1) 日本人学生と留学生がともに学び合う授業において、双方のコミュニケーションにどのような問題が生じるのかを、参与観察により記述・考察 (2) 日本人学生と留学生が主体的に関わり合う授業の中で、双方の学生の「異なる言語や文化、多様性に対する意識」がどのように変化するかを、面接調査によって明確化	谷口ジョイ・谷口正昭	静岡理工科大学紀要	2021
44	オンライン海外研修での国際共修の可能性と課題	三重大学の短期海外研修のベトナムフィールドスタディの紹介と学生の感想の紹介	奥田久春・松岡知津子	三重大学高等教育研究	2021
45	接触場面のインターアクションにおける母語話者の意図と学習者の戸惑い	プロジェクト遂行型国際共修授業における言語使用に近い疑似的場面から、非母語話者が母語話者に対して、その逸脱に留意し否定的評価をしたケースについての研究	竹井光子	広島修大論集	2021
46	多文化間共修クラスの教養教育における位置づけと将来像 —弘前大学での実践から—	弘前大学での共修授業の紹介	小山宣子	弘前大学教養教育実践開発ジャーナル	2021
47	オンライン国際連携学習 (COIL) の実践と考察 : 海外パートナー校の大学院生による学習支援	4人のアメリカ人大学院生と12人の麗澤大学の学生が参加した。2019年度の7週間のCOILの概説と学習意欲の向上要因についての分析	山下美樹	麗澤大学紀要	2021
48	ブータンの大学との国際共修プログラム実践と教育的価値に関する考察	国際共修プログラムの紹介とその効果の検証	草郷孝好・長谷川伸	関西大学社会学部紀要	2021
49	コロナ禍におけるバーチャル交流 ——日本と台湾の連携事例から——	バーチャル交流の実践報告	竹井光子・横田和子・藤美帆・佐藤敏洋	広島修大論集	2021
50	プロジェクト学習型国際共修授業における教育実践 : 学習者間の学びを促す仕組みについて	教育実践の紹介	黒田千晴・リチャードハリソン	神戸大学留学生教育研究	2021
51	トランスカルチュラル・コミュニケーションとしての異文化コミュニケーション、トランスランゲージングと(マルチ)リンガ・フランカとしての英語(1) : オンライン多文化共修の再概念化に向けて	モデルの提唱	丸山真純	経営と経済	2021
52	「やさしい日本語」による市民との交流を取り入れた多文化クラスの活動	授業の紹介とレポートなどの分析	山田悦子	メディア・コミュニケーション研究	2021
53	教養ゼミにおける多文化間共修～教養ゼミ2年間の振り返り～	授業の紹介とアンケート調査の分析	林智	富山県立大学紀要	2021
54	アクティブドローライティングによるつまづき分析と読解支援 —日本人学生との共修をふまえて—	日本語学習における文章の要約について、ドローイング(イラスト・漫画)を導入することによる効果の検証	小柴裕子・佐古恵里香	京都精華大学紀要	2021

55	異文化間能力 Can-Do による学生の意識調査—国際教育カリキュラム検証への示唆—	異文化理解の学生理解の測定、効果検証	竹井 光子・矢田部順二・佐渡紀子・隅田 姿	広島修大論集	2021
56	国内学生と留学生が多言語で共に学ぶプロジェクトの試行と課題	ワークショップの概要紹介と事前・事後アンケートの分析	平松尚子・鈴木綾乃・速水淑子	横浜市立大学論叢人文科学系系列	2021
57	室蘭工業大学と RMIT 大学の国際共修の歴史	研修プログラムの内容と学生の感想の紹介	大橋裕子	室蘭工業大学紀要	2021
58	(実践報告) 協定等に基づく多文化共学短期派遣留学プログラム	留学プログラムの詳細を紹介	韓立友・西島薫・家本太郎・河合淳子	京都大学国際高等教育院紀要	2021
59	コロナ禍における国際交流の新たな取り組み	異文化交流の紹介と学生の感想の分析	蕪木絵実・御館久里恵・池田玲子・安延久美	大学教育研究年報 (紀要論文)	2021
60	新型コロナウイルス禍での遠隔授業におけるグローバル体験の効果と可能性について	遠隔授業の内容紹介と学生とゲスト講師のアンケート・感想紹介	宮武香織	九州国際大学国際・経済論集	2021
61	ポストコロナに向けた国際教育交流—情報通信技術 (ICT) を活用した新たな教育実践より	オンラインツールを活用した教育実践の紹介	新見有紀子・星野晶成・太田浩	留学交流	2021
62	室蘭工業大学における国際学術交流協定の現状と今後の国際学術交流協定の在り方に関する提言	室蘭工業大学の国際学術協定の現状の紹介	白 尚燁	室蘭工業大学紀要	2021
63	ヨーロッパ研修旅行 ドイツで学ぶ英語—外に開かれた窓	研修旅行の紹介と振り返り	クラウゼ小野 マルギット	室蘭工業大学紀要	2021
64	モンゴル協定校との学術交流に関する活動報告	交流活動の紹介	小野 真嗣	室蘭工業大学紀要	2021
65	タイ王国チェンマイ大学との学術国際交流について (合同シンポジウムの活動を中心に)	学術交流 (4回のシンポジウム) の紹介	風間 俊治, 花島 直彦, 湯浅友典, 寺本 孝司, 藤木 裕行, 長船 康裕, 松本 大樹, 河合 秀樹	室蘭工業大学紀要	2021
66	希土類材料研究センターにおける国際協力教育・研究活動	海外の大学との学術協定やワークショップの紹介	雨海 有佑, 秋岡 翔太, 馬渡康輝, 平井 伸治	室蘭工業大学紀要	2021
67	多様なバックグラウンドを持つ学生が共に学ぶ人権教育	留学生と国内学生が共に人権を切り口に議論し学ぶ効果の検証	高橋美能	留学生交流・指導研究	2021
68	対面による国際共修授業の意義と効果—新型コロナウイルス流行前の実践から—	新型コロナウイルス流行前に実践した国際共修授業の振り返りとその効果の考察	高橋美能	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	2021
69	多様なバックグラウンドを活かす国際共修授業の実践—オンラインで実践する授業のメリットとデメリット—	オンラインで実践する国際共修授業の効果と課題	高橋美能	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	2021
70	ネパールにおける学術交流活動についての第一報	学術交流活動 (日程ごとの詳細) についての紹介	佐藤 和彦	室蘭工業大学紀要	2021
71	海外大学とのPBL型国際共修 : 地元企業と連携したグローバル教育実践	GRIPのプログラムの1つとして、シンガポール国立大学の日本語履修学生達と約1ヶ月間のオンラインによるPBL型 (問題解決型学習) の国際共修を行い、学生たちが回答した振り返りシートの内容をKJ法で分析。最後にはプロジェクトの効果検証	清藤, 隆春 齋藤, 亨子 橋本, 智	高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報	2021
72	国際共修によるグローバル人材育成を目指した大分大学国際フロンティア教育プログラムの実践成果と今後の課題	大分大学国際フロンティアプログラム (授業ではなく、教育プログラム) の説明と受講アンケートの紹介	ブルカート香織	大分大学国際教育推進センター紀要 (2号)	2021
73	国際共修授業における多文化共生の実現 : 学生同士の言語サポートを促すことを通じて	国際共修内のクラス内の参加者同士の助け合いと多文化共生の関係について	高橋 美能	留学生交流・指導研究	2021
74	海外協定校とのオンラインによる PBL 型国際共修の試案—南昌大学との事例から—	授業の紹介と授業内のやりとりのコメントなどの紹介	トンプソン美恵子・姚琴	語学教育実践	2022
75	高等教育国際化の手段としての国際共修授業が持つ可能性と課題	国際共修授業における留学生 TF の教育支援の可能性と課題について調べることを目的とした調査	島津礼子・丸山恭司	中国四国教育学会 教育学研究ジャーナル	2022
76	オンライン国際連携学習の試み—日韓協定校間における同時双方向型国際共修—	オンライン交流授業内容の紹介と事後アンケートの分析	西村美保・中島忍	清泉女子大学紀要	2022
77	ハイブリッド (ハイフレックス) 型授業を通じた多文化間共修の実践—立命館アジア太平洋大学初年次科目を事例として—	立命館アジア太平洋大学での多文化間共修の紹介	筆内美砂・カッティング美紀・秦喜美恵・筒井久美子・平井達也	リメディアル教育研究	2022
78	国際共修科目のプログラム開発—日本人学生と留学生が伝え合うための取り組み—	十文字学園女子大学での授業の改善についての報告	山下悠貴乃	筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集 (紀要)	2022
79	正課の総合教育科目における多文化間共修—協働活動での学部留学生に着目して—	言語学の授業における学部留学生と日本人学生の共同活動についての報告	二宮理佳	中央大学論集	2022
80	異文化間協働学習における自己変容プロセス	異文化間協働学習における日本人大学生 (以下、日本人学生) の自己変容プロセスのモデルの生成	西岡麻衣子	京都産業大学論集	2022

81	「偏見につながる心理」の変容—集団間接触理論に基づいた異文化間協働学習を通して—	留学生と日本人学生の協働学習を対象とした偏見の心理の変容についての実験研究	西岡麻衣子	関西大学高等教育研究	2022
82	オンライン国際教育プログラムにおける学びの検証	授業の紹介とその効果の検証	索野 香子, デオ ヴィビン クマル	静岡大学国際連携推進機構紀要	2022
83	EFLからELFへ —多文化共修におけるビジネス英語科目の再設計に向けて—	授業の紹介	天野剛至・佐藤瑠美	鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要	2022
84	留学生の日本語による詩の創作活動がもたらした諸効果—日本語教育とキャンパス内多文化共生の観点から—	詩を使った多文化共修の実践報告	田中真由美	日本福祉大学全学教育センター紀要	2022
85	国際共修場面における学生間の葛藤の要因 受講生の意識の差に着目して	国際共修授業の受講生42名を対象に、グループ活動での経験に関するインタビュー調査を実施。語りの内容を計量テキスト分析の手法を用いて、葛藤の有無及び留学生と国内学生に分けて集計。各郡の特徴を分析したところ、葛藤あり群は一律にチームワークについて語るものの、留学生と国内学生とではそれに対する解釈が異なるという結果	藤 美帆	留学生教育	2022
86	「やさしい日本語を話そう」から相互言語文化学習デザインへ 国際共修科目のデザインに関する一考察	授業実践の報告とアンケートの分析	小山, 宣子, 長尾, 和子	弘前大学教養教育開発実践ジャーナル	2022
87	大学で留学生と国内学生が共に「人権」を学ぶ授業の効果 : オンラインによる国際共修授業の実践	オンラインを利用した人権教育の実践、さらに国際共修という環境での学びに着目し、授業効果を分析	高橋 美能	人権教育研究	2022
88	大学生の言語的・文化的多様性を考えた日本語による学びの場のデザイン	日本語教育におけるピアラーニングの紹介と実践報告	奥村 恵子	明治学院大学国際学研究	2022
89	国際共修科目で構築される学びの「場所」—協働構築するコンピテンスという概念にむけて—	国際共修科目の成果報告書を協働構築という視点から分析し、国際共修の「場所」がどのように折衝されたのかを解明	加藤 鈴子	九州工業大学教養教育院紀要	2022
90	海外留学に代わる国際共修活動の実践とその評価 — ユーザーエクスペリエンス調査に基づく定量的な満足度分析の試み —	コロナ禍において、日本国内、とりわけ学生の日常生活基盤となる自大学周辺における留学疑似体験としての「地域内留学」について実践事例の報告とその評価	小野 真嗣	CIEC春季カンファレンス論文集	2022
91	留学生と日本人学生のキャリア形成支援のための教材設計	留学前後の日本語学習者および日本人学生を対象とした、キャリア形成支援のための教材設計	中井 陽子・菅長 理恵・伊集院 郁子・渋谷 博子	日本語教育方法研究会誌	2022
92	活動理論からみた国際共修の再考 : テーマ設定の観点から	受講生の共通性を強調し、かつ多文化とは異なるテーマでデザインした国際共修授業の実践とそれによりどのような受講生が集まり、関心が変化をするのか検討	藤 美帆	比較文化研究	2022
93	2007年からの信州大学での国際共修の取組—多文化共生の指導を視野に入れて—	2007 年から信州大学で本稿執筆者を中心に行われてきた国際共修活動を丁寧に記録・公開	佐藤友則	信州大学総合人間科学研究	2022
94	2021年群馬大学オンライン英語サマープログラム「群馬のグローバルチャレンジ: 自然、伝統と現代社会」の実施報告と調査データ分析	プログラムの企画と経緯、趣旨、内容と構成、日本人学生と海外協定校学生との国際共修について説明。54人のアンケート調査のデータを解析し、プログラムの成果や改善すべき点について分析	陳雲蓮・野田岳人・田中麻里	群馬大学国際センター論集	2022
95	文化・言語的多様性を取り入れた学習環境 ポストコロナの国際共修	ICT環境を取り入れた新たな国際共修についての解説	米澤由香子	JACET中部支部紀要	2022

禍における国際共修授業の事例紹介が多数あり、2018年以降の変化という点では、オンラインを利用した国際共修授業の実践が多数紹介されていたことである。

また、末松（2019）がアンケート調査について、独自に開発されたアンケートを使用しているという指摘をしていたが、今回の調査でも同様の結果となった。このことから示唆されることは、国内の国際共修授業の研究が、自身の実践報告と授業成果の報告から、国際研究に発展させるべく、実践をベースに普遍的な理

論の構築を検討することが課題であるという点である。その1つの方法として、末松（2019:11）が述べているように、国際専門誌等に報告し、日本の教育実践が海外の国際共修授業に示唆を与えるように発信していくことではないだろうか。

冒頭でも述べた通り、国によって国際共修授業の提供目的、環境が異なる。日本では国際共修授業が、留学生と国内学生の双方にとって、メリットがある形で授業設計が検討されているが、これは必ずしも他の国

には当てはまらない。そうはいつても、異文化・異言語の学生が授業とともに学ぶことで、授業のテーマに対するディスカッションの幅が広がり、学びが深まることは確認されている。この点は、国という枠組みを超えた普遍的な効果であろう。その意味で、表1にまとめた国際共修授業の先行事例を国外に発信していくことで、他の国にも「国際共修」の意義と効果を共有し、留学生と共に学ぶことの意味を強調していくことが大切ではないだろうか。国際共修授業は、授業のテーマに関わる知識だけではなく、そのテーマを通じて学生間で議論することで、異文化理解を深めていくことにもつながる。本稿では国内での国際共修授業に関わる先行研究が事例分析にとどまっているという課題が残されたが、国内外に実践例を共有し国際研究に発展させることで、海外の国際共修授業の事例から新たな示唆を得、理論を構築する基礎が築かれる可能性を秘めていると考える。

4. まとめ

本稿では、日本の国立大学の留学生と国内学生が共に学ぶ国際共修授業の授業提供数、先行研究の動向について、調査結果を踏まえてまとめた。学内で留学生と国内学生が共に学ぶ環境を整えることは、日本の大学で大学の国際化の1つとして取り組まれているが、必ずしも世界で同様に考えられているわけではない。日本では英語での国際共修授業の提供が最多であることを紹介したが、そこでは留学生が主な対象となって授業が設計され、その中で国内学生が留学生と交流することや自身の語学力向上を目的に参加している。学生間の交流を1つの目的とする日本の国際共修授業は、コロナ禍ではオンラインを利用して継続され、コロナ前よりも多様な国内外の大学の学生が1つのクラスに参加することが可能となった。

国際共修授業に関する先行研究は、新型コロナウイルスの影響を受けて授業がオンライン化されたことにより、オンラインの実践報告が多数見られた点に変化があった。授業を担当する教員が、研究として自身の実践事例を紹介する傾向が高い点は、2018年以降変化は見られなかった。また、国際共修授業に関わる先行研究が、担当者のGood Practiceの紹介にとどまって

いるという課題は残された。他方、日本の大学が提供する国際共修授業の特徴である学生交流とその成果について、今後国外にも発信していくことで、世界の大学においても留学生と共に学ぶことの意義が確認され、授業実践に生かしていく示唆が得られるのではないだろうか。オンラインには、より多様な学生交流を可能にするポテンシャルがある。本稿では現状報告にとどまったが、その中で示唆された課題やポテンシャルを今後に生かし、研究を深めていきたい。

最後に、本稿でまとめた調査結果は大学のHPや検索エンジンを使用しての調査であり、調査手法に限界があることを断っておく。

引用文献

- 高橋美能（2019）「国際共修授業の普及と多様なバックグラウンドの学生同士の多文化共生」国際共修授業の普及と多様なバックグラウンドの学生同士の多文化共生（jasso.go.jp）（閲覧2023/9/13）。
- 末松和子（2019）「国際共修の検証－文献リサーチを通して見えてくるもの－」（jasso.go.jp）（閲覧2023/9/13）。
- ※全国の国立大学のHPのURL、および先行研究に関するインターネットを利用した論文情報に関するURLは省略する